

KAWADE'S
PAPER BACKS

文芸読本 中村真一郎 編

源氏物語



河出書房新社

文芸読本

源氏物語



宿木三 (源氏物語絵巻)

中村真一郎編

Kawade Paperbacks 7

文芸
読本

源氏物語

装幀者 原 弘 (NDC)

昭和37年9月10日 初版印刷

昭和37年9月15日 初版発行

定価 280 円



編者 中村真一郎

発行者 河出孝雄

印刷者 柳川太郎

発行所

東京都千代田区
神田小川町3の8

株式
会社

河出書房新社

電話 東京 (291) 3721~7

振替口座 東京 10802

©1962

・ 落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

文芸読本源氏物語 目次

源氏物語への案内——中村真一郎——1

■源氏物語へ与謝野晶子訳▽

桐壺きりつば——21

帚木ははきぎ——37

空蟬

夕顔ゆうがお——53

若紫 末摘花 紅葉賀 花宴 葵 賢木 花散里

須磨すま——82

明石 あかし
—— 107

落標 蓬生 関屋 絵合 松風 薄雲 朝顔 乙女
玉蠶 初音 胡蝶 螢 常夏 篝火 野分 行幸
藤袴 真木柱 梅ヶ枝 藤裏葉

若菜 わかな
—— (上) —— 131

若菜 わかな
—— (下) —— 186

柏木 横笛 鈴虫 夕霧 御法 幻 雲隠
匂宮 紅梅 竹河 橋姫 椎本 総角 早蕨
宿木 東屋

浮舟 うきふね
—— 242

蜻蛉

手習 てならい
—— 286

夢の浮橋

■研究編

I

伝統・小説・愛情 — 折口信夫 — 331

描写・小説・源氏物語 — 風巻景次郎 — 337

「宇治十帖」〔中世文学へ〕 — 小田切秀雄 — 342

源氏物語と近代文学 — 吉田精一 — 348

II

源氏物語〔原作と翻訳〕 — 正宗白鳥 — 355

若菜の巻など — 堀 辰雄 — 363

源氏物語随想 — 円地文子 — 367

源氏物語 — 山本健吉 — 374

舟のかよい路 — 丸谷才一 — 386

III

源氏物語 — ドナルド・キーン／根村絢子訳 — 391

注釈／池田弥三郎

表紙写真／黎明会

写真／黎明会・大映本社・演劇出版社

源氏物語への案内

〈まえがき〉

この読本は、日本の代表的古典の源氏物語について、一般の読者に大体の概観を与える目的で編集された。

文学作品は、まず何よりも先に、現物を読むことが必要である。ただ、現代の作品とちがって、千年前の古典である『源氏物語』は、読む前に、時代や著者や、また作品の構成、主題などについて、ある程度の予備知識のあった方が、入りやすいと考えたので、編者自身による〈解説〉を最初に置いた。

〈解説〉に一応、目を通したら、すぐ本文に入るわけであるが、紫式部の原文を、いきなり普通の読者に提出するのは、無理であると思ったので、現代語訳を載せることにした。なぜ与謝野訳にしたかという理由は、〈解説〉の初め

の部分に記しておいた。

それから、何しろ本文といっても、『源氏物語』はきわめて膨大なもので、とうてい、五十四巻全編を載せるわけにはいかない。それで、重要だと思われる代表的な巻を九巻だけ選んだ。そうして、その間は編者の説明によって繋いだ。編者としては、このやり方が、全編をダイジェストするよりも、原作の面影に接するのに、適していると信じるからである。

小説というものは、たとえ一部だけでも、作者の書いたままを読む方が、短い筋書を読むよりは、よく判るものだ、というのが編者の日頃からの信念である。

本文の後に、『源氏物語』についての現代の学者や文学者の感想、批評などを集めた。読者は自分の読後感と、これらの専門家の意見とを対照して、いろいろと考えてみるのがいいと思う。これらの文章の個々については、「研究

中村 真一郎

編」の最初に編者が説明を書いておいた。

この一冊によって、読者が『源氏物語』に対する興味をおこし、全文通読の情熱を湧かせ、さらには原文につくことになれば、編者の望みは達せられたことになる。

〈解 説〉

1 翻 訳

『源氏物語』は現代のわれわれにとっては、日本文学の伝統的古典の最大のものであり、同時に、今日なお感動をもつて読むことのできる大小説である。そして、それは単に日本の読者にとってそうであるだけでなく、世界中の文学読者にも、代表的な小説のひとつとして承認されている。

もちろんだからと言って、原文で読むことは普通の読書人にとっては時間のかかりすぎる仕事であるから、大部分のひとは翻訳で読むことになる。しかし、本来、小説というものは詩とは違って、現代語に直したもので、かなりその面白さは判るものである。現に西欧の大作を、われわれはたいがい翻訳で読んで愉たのしんでいるし、われわれ日本人現代の文学読者にとっては、西欧文学の翻訳は不可欠のものである。だから、同様に『源氏物語』も充分現代訳で読むべきだし、この与謝野訳は明治以後の翻訳文学のなかで

も、一二を争う傑作なのだから、なおさらわれわれは安心して読める。——いったい小説というものは、これは重大なことであるが、その文学的效果を読者が受けとるのに、必要な読書速度というものがある。ある程度以上ゆっくり読むと、小説は作者の予期した効果を發揮しなくなる。再読三読の場合にはかくとして、たとえば『源氏物語』の一章ずつを、はじめて読むのに一月もかけていたのでは、まったく全体の見通しのつかないものになる。最も遅くともせめて一章（一卷）を、一晩で読むくらいの速さでなくては、無理である。

作者もはじめからそのつもりで書いているのであろう。とすれば、現代訳で読まなくては無理だということになる。そうして、その上で充分全体の結構に慣れ親しんだ後になって、今度はゆっくりと原文を愉しみながら読むというのは、また読者にとって新しい喜びとなるであろうが。

平安朝の散文は日本語といっても、千年前のものであり、われわれの、特に明治以後の西欧的学問を通過した、現代日本語とは非常に違ったものである。あるいは西欧の近代語のほうが、発想や思考過程の点で、平安語よりはわれわれに近いかもしれない。——だから、近代の大作家である正宗白鳥氏は、アーサー・ウェイレの英訳で通読して、はじめて『源氏物語』の面白さを理解したと告白している。

与謝野訳の日本語は森鷗外などの系統の現代語で、それ

入ることができるわけである。

2 時代

それでは、『源氏物語』はどのような時代に生まれたか。それは平安中期、だいたい十世紀の末から十一世紀にかけての、一条帝の治世である。この時期は、平安前期の延喜天曆（十世紀前半）の盛時に匹敵する、文化的全盛期であり、あるいは日本の歴史のうえでも、最も高度の完成した文化状態に達した時期かもしれない。

この時期は政治的にいえば、藤原氏の勢力が頂点に達した時で、藤原道長がその中心人物であった。

また文化的にいえば、前期が大陸の唐文化の移入期で、文学作品としても漢詩文や翻訳の文学論の盛んな時であった後をうけ、伝統的な感受性により、その前代の遺産が日本化される時期だった。

この時代の政治は、摂関政治といわれ、あるいは外戚政治と呼ばれているように、勢力者が娘を天皇の后とし、その後から外孫が生まれると、みづからは摂政や関白となつて、独裁的な政治の実権を握るというやり方だった。

一条帝の宮廷では、帝の生母の詮子が藤原兼家の娘だったので、兼家は摂政関白太政大臣となつて政権を握った。

そして、今度は兼家の子らがお互いに政権を争うことになり、帝の後宮には、道隆の娘定子が入つて皇后となり、次

は感情的ニュアンスの表白に便利な和文系ではなく、西歐語の論理的思考と漢文の簡潔さとを融合させて作りあげた新しい口語体である。従つて、原文の曲折に富んだ陰影のある文体とは、かなり違つており、それだけにかえつて現代人の思考と感覚とに直接的に訴えるものを持つ。従つて、与謝野訳により『源氏物語』に入るといふのは、最も自然である。

ついでながら、もうひとつの名訳である谷崎潤一郎氏のものは、これは作者自身の陰翳美学によつて、現代語で可能なかぎり、原文の曲折を追おうとしており、それは与謝野訳とは正反對の行き方である。つまり、谷崎訳は王朝物語として『源氏物語』を再現しようと努力しているのであり、与謝野訳は、小説として再生しようとしているわけである。

『源氏物語』は、現代のわれわれにとつては小説であるが、一方、当時の読者にとつては物語（それも、フィクションとしての作り物語）であつた。

『源氏物語』は傑出した文学作品がそうであるように、時代の制約を越えて、また国境を越えて、小説として普遍化されるだけのものを持つていたが、もちろん、書かれた時は千年後の読者を予想したものではなく、当時の文学形式のひとつである物語として作られたわけである。

私たちは与謝野訳やウェイレー訳によつて小説として読んだ後で、谷崎訳や原文によつて王朝物語の独自の世界に

いで道長の娘彰子も中宮となった。

こうした皇后や中宮は、それぞれ美貌と才幹とのある侍女にとり巻かれていて、それが当時の文化的中心となったことは、『枕草子』などを読むとよく判る。

当時の後宮の皇妃たちまた皇女のなかで斎宮や斎院となつた人々などのまわりに仕える侍女たちが、文化担当者となり、それらの後宮や斎院などはサロンとなった。

つまり、後宮文化、サロン文化の時代であり、一条帝の時は、皇后定子と、中宮彰子と、それから別到大斎院宮選子内親王とが三つの文化的文学的中心となった。それらの貴女のまわりには、多くの才女たちが集まり、それぞれ対抗意識を燃やした。

従つて、この時期の文学の中心をなしたものは、侍女たち、当時の言葉でいえば、女房たちで、男性の文学者たちも彼女らと交際することで、文芸の世界へ参入していったといえる。

女房たちは競つて、随筆、物語、日記を書き、歌を詠んだ。

特に注目すべきことは、前の時代では文学者の主な精力が漢文を書くことに捧げられていたのが、この時期の直前から、ようやく和文を書く気運が起こり、そして漢文を綴ることが専ら男性の仕事だったのに反して、和文のほうは女性の仕事となった。そのためにこの時期は、女性たちによる和文の完成期ということになった。——純粋な日本語

の散文はこの時期にはじまったのであり、その創始者は宮廷の女性たちだったのである。

わが国の散文の創始者たちが女性であるということ、またそれも宮廷女性であるということは、この時代が日本文学の散文における最大の古典期となつたために、将来に独自の影響を与えることになった。日本文学の特徴として指摘される幾つかのことは、実は十世紀から十一世紀にかけての、宮廷女性の感受性の特性であるかもしれないのである。

それではこれらの女房たちは、どのような階級の出身であらうか。当時の第一階級を皇室および皇室と親戚関係にある大貴族とすれば、第二階級は藤原氏のなかでも勢力のない人たち、また前代までに宮中を追われた他氏の人たちであり、彼らは貴族ではあるが、中央に地位を得ることができず、一生を地方官——当時の言葉でいえば受領として送つた。その階級の娘たちで才能と美貌との所有者が、第一階級の人たちに発見されて後宮や皇女のもとに、家庭教師とか侍女とかいう役目を持たされて、採用されたのである。

3 作者

『源氏物語』の作者が、一条帝の中宮彰子の後宮に仕えて、白氏文集の楽府を中宮に進講したり、その教養のため

に「日本紀の局」と同僚たちに渾名^{あだな}されたりしていた紫式部であることは確かしい。しかし、現在、われわれの読む『源氏物語』が、紫式部の書いた原文そのものであるかどうかには、専門家の間でいろいろ議論がある。

現に与謝野晶子は、『若菜』以後を、紫式部の娘の大貳の三位の筆になるものと推定している。私は『若菜』から『柏木』あたりを、この物語の最も深い部分と信じているので、もし与謝野説によるとすると、この日本最大の小説を書いた天才は、実は母のほうではなく、娘のほうだということになる。——が、この説は必ずしも一般の承認を得ているものではない。

が、少なくとも終りの十巻『宇治十帖』と呼ばれている部分は、後の人（それも男性）が簡潔に書き直したのではないかという意見も出されている。

また、もし全体を紫式部がひとりで書いたとしても、当時は出版ということはなかったので、専ら筆写によって拡がって行ったため、書き写す人がさまざまの書き変え、書き加えをしなかったとは断言できない。

とにかく原本と現在の『源氏物語』については、学者の間で長く研究され討論されていて、それはまだ結論の出るところまではいっていないようである。たとえば、各巻の配列が現在のままでいいか、また現在の配列の順に書かれたか、というような点でも問題であるらしい。が、本筋をなす主要な部分を紫式部が書いたということは、だいたい

問題はないだろう。

紫式部の家は藤原氏の一族であるが、主流ではなかった。地方官の家柄である。しかし、一族は代々、傑れた歌人が多く、勅撰集に名を列ね、父は当代一流の詩人儒学者であった。

また、外祖父の兄弟は、『蜻蛉日記』の作者の姉妹と結婚しており、『蜻蛉日記』の作者の兄弟は、清少納言と姉妹であるというように、この時代の代表的な女流作家たちとも、家庭的に幾分のつながりがある。

そうした環境で育てられた彼女は、幼少の時から漢籍、仏典、音楽を学び、並々ならぬ才能を示していた。そして、若くして未亡人となると、寡居生活の憂悶を解くために『源氏物語』という大作にとりかかった。

そして、この作品の評判がよかったからだと思われるが、中宮彰子のところに仕えることになった。当時、中宮側の対立勢力である皇后定子のところには、『枕草子』の作者が仕えており、恐らく紫式部は清少納言に対して、かなり激しい敵対感情を持つに至ったらしい。彼女の同僚には、また和泉式部とか赤染衛門とかがいて、彼女らも紫式部に、文学的刺激を与えたことだろう。そうして、そのような文学的環境のなかで、『源氏物語』はさらに書き進められ、拡げられて行ったものと私は想像する。

彼女の名声はいよいよ高まり、中宮彰子も一条帝も、また彰子の父であり、当代第一の勢力者、独裁的政治家であ

った道長にも目をかけられた。道長は彼女を愛人としようとしたこともあり、『源氏物語』にも幾らか手を入れたかもしれないという噂もあるくらいである。

そして、彼女はこの時代の最も傑出した文化人である。四納言と併称された、公任、行成、斉信、俊賢などという男性たちとも対等の交際をして、当時の最高の文化の中心に暮らすという好運を担った。

しかし、彼女はそうした華かな境遇のなかで、ひたすら愉しく暮らすということの出来なかった、むしろ暗い性格の女性であつたらしく、特に晩年は父が地方に行き、兄も死に、帝もなくなり、親友の少少將の君とも死別するというような、淋しいことが続き、そのために厭世的傾向を強め病弱にもなつて、不幸な生活を続けるうち、四十歳前後で没したらしい。

彼女はその宮廷生活と内面生活との記録『紫式部日記』を書き残しているで、(この日記は、当時の日記文学のやはり代表的なものであるが)その日常生活や性情について、われわれは多く知ることができる。

4 物語

物語という文学形式は紫式部の発見ではない。

彼女が文学的に出発しようとした時、すでに先輩たちのさまざまな試みがあり、彼女はそれを総合しながら、『源

氏物語』という大きく複雑な物語を作りあげたわけである。

まず、最も直接的な先行作品としては『宇津保物語』がある。これは社交界を舞台とした恋愛小説、風俗小説(風俗のなかには、最上流階級の人々が人物であるから政治も含まれる)であり、この作り物語の方法を洗練させ、より細部の真実性を強調すれば、『源氏物語』に近づいて行くであろう。

が、また一方に、『伊勢物語』というような歌物語——ひとりの主人公のさまざまな女性との交渉を、挿話風にならべて行く抒情的な物語もあった。主人公と女たちとの関係、また恋愛感情における抒情性の点で、たしかに『伊勢物語』は、『源氏物語』のうえに大きな影を投じている。

あるいはまた、日本の物語の先祖ともいふべき『竹取物語』も、紫式部に構想上の刺激を与えただろう。『竹取物語』は童話風の語り口のなかで、ひとりの女性を理想的な姿にまで高めている。『源氏物語』のなかでは、男の主人公源氏が、かなりかぐや姫に似た位置を持っている。

そのうえ、『竹取物語』にも『伊勢物語』にも『宇津保物語』にも欠けたものがある。紫式部はそれを『蜻蛉日記』のなかに発見したに相違ない。

『蜻蛉日記』は、道長の父で、政權を握った兼家の妻であつた女性によつて書かれた回想録であるが、彼女は当時、流行していた(そして後に紫式部も読んだに相違ない——

しかし、今日では消滅している。『正三位』とか『交野少将物語』などを読み、自分自身の生活とひきくらべて、あまりにそれらの物語が虚偽に満ちているのに反感を抱いて、この回想録を書いたのだった。

それは淫靡で浮華な男女関係の物語ではなく、夫婦生活の困難さを、専ら心理的・内面的に追求した、執拗で迫真的な記録である。

紫式部は『蜻蛉日記』に親しむうち、この内面的方法を物語に適用すれば、物語そのものも迫真性と深刻さを持つことができると思いついたのだろう。

さらに彼女は漢籍を自由に読むことができた。唐代の詩はもちろんのこと、たとえば『柳氏伝』というような伝奇類も、参考になったかもしれない。それらの伝奇類には、都会生活の描写があるからである。

それから、『源氏物語』を読んだ一条帝が、「この作者は日本紀を読んでいるだろう」と感想を述べたことから判るように、わが国の史書からも、さまざまな暗示を得ていることは間違いない。

そうして、最後に彼女は彼女自身の広い、また、深い体験をこの物語に投入しようとした。特に宮廷の社交生活は、多くの型の人物たちの生を觀察し、珍しい事件の裏面を知るには、最適の環境である。当時、『源氏物語』は宮廷人たちには、ゴシップ集としても、面白がられたことだろう。読者は自分や自分の恋人や恋敵などの言ったりし

たりしたことが、意外なところにはめこまれているのを発見して苦笑したことだろう。

こうして、当時のほとんどあらゆる文学形式の総合としての『源氏物語』が構想された。それは偉大な作品が常にそうであるように、従来の先行作品の否定であると同時に、発展となった。（これはフランス十七世紀に、当時のロマンの荒唐無稽なのにあきたりなくて、その形式の否定として書かれた写実的な作品『クレヴ公妃』が、フランス心理小説の傑作となり、新しい伝統となったのと、あまりにも類似した事情である。その事情の結果であろうが、『クレヴ公妃』は『源氏物語』に雰囲気のうちでも、実によく似た作品である。）

5 小説

こうして成立した『源氏物語』は、単に王朝物語の傑作というにとどまらず、今日の近代小説の考え方からしても、充分に、小説といえる。

そこで、これからは今日の読者のために小説として、この物語を分析してみたい。

『源氏物語』は小説である。それも今世紀の西欧の批評家の命名に従えば、『大河小説』の部類に入る大作である。

登場人物は約五百人、時間的には三つの世代の盛時にわたっている。

従つて物語は各世代ごとに区切れば、三つの部分に分れることになる。

第一部は光源氏の青春期から、生活の上り坂の頂点に立つた（太政天皇に準ぜられる）四十歳の祝賀会あたりまでである。（『桐壺』——『藤のうら葉』）

ここでは若い皇子の光源氏と、その妻の兄の頭中将との世代の運命が、光源氏を中心とする、さまざまの恋の挿話と、その敵手としての頭中将との対立とを主筋として描かれている。

光源氏の悲劇的な初恋（これは物語全体に澤を引くが）と、それに続く二十歳前後の無制約な恋の戯れ。その戯れが過ぎて、都を去り、須磨の海岸での侘住い。それから政変に伴う帰京と再起。そして壮年としての幅広い光源氏の生活が展開する。

第二部は、主役となるのは、むしろ、源氏の子の夕霧と頭中将の子の柏木である。

柏木の軽率な行爲が晩年の源氏に打撃を与える。

ここでは第二の世代の前進に伴う、第一の世代の後退が描かれているといつてもいいだろう。特に柏木と夕霧との友情は美しく描かれている。（『若菜上』——『幻』）

第三部は、源氏没後のまったく新しい世代の物語で、もう第一部の人物たちの孫の時代である。（『匂宮』——『夢の浮橋』）

源氏の孫の匂宮と、頭中将の孫の薫との対立によつ

て、運命を狂わせられて行く、三人姉妹の物語である。

この三部を通読して行くと、われわれは各部における雰囲気微妙な相違、また作者の物語の作り方の目に立つ違いに、注目しないではいられない。

第一部は、特に書き出しの『桐壺』の巻はまだ先行物語の童話的手法の影響が脱けていない。写実的な小説というより、ロマン的な物語といった感じである。

それに第一部は主人公に、相手の女性たちが、ばらばらに個々に結びついているため、同一主人公を中心とした、相互に無関係な短編連作といったおもむきもある。それが近代的な見方をすれば、『源氏物語』はロマン（長編）ではなく、コント（短編）の積み重ねに過ぎないのではないかと、否定的な意見のでてくる理由なのだが、しかし、この女性たち相互の結びつきの稀薄な点は、それはそれで、やはり社会の拡がりを読者に喚起してくれるという、長編としての面白味ともなっているので、そうした批判は行き過ぎだろう。

むしろ読者は、それぞれの女主人公の背後に拡がっている、別の家庭、別の階級に、次々と接することで、千年前の京都の社会構成の、複雑で微細な要素を知らされ、それによつて一社会の多様性への親近感を増すことになるのだと思う。

が、第二部になると、作者の筆は、まぎれもなく長編作家のものとなる。ここではいたずらに間口を拡げ、綺麗

絵のような光景をならべてみせるという風ではなく、人間の心のなかに深く入り、執拗な追求をはじめめる。中年の源氏とその若すぎる妻と若者との三角関係における、三人三様の苦しみの描写の深刻さに匹敵する小説は、滅多にないだろう。

そうして、第三部は、特に最後の『宇治十帖』と呼ばれる十巻は、これは古典的な完成を示した、形式美を誇るもので、第二部の大河の流れるような創造のエネルギーは、調和のとれた音楽的な構成に変わっている。

この部分の完成があまりに破れ目がないたために、古来、『宇治十帖』は別人の創作ではないかという意見が絶えないのである。

第一部を混沌、第二部を深化とすれば、第三部は典雅な静止ともいふべきで、この大長編のなかで、この部分だけが不思議な別世界を作っているということは、否むことができない事実である。

6 主 題

小説は主題を特に強調して描きだすものと、そうでないものがある。

つまりある一定の思想を展開するために、小説という形式を用いるのと、そうでなく、ある情景を再現することを目的とするのと、二傾向があるわけである。もっとも実際

には、前者も情景ぬきでは語れないし、後者もおのずから作者の人生観は反映するので、明確にこの両傾向に区画をつけることは不可能だが。

ところで、王朝の物語には、本来、歌を中心として、その歌にまつわる話を書くという歌物語が、背骨としてあったから、『源氏物語』も作者が何か特別な主題を、はじめから形象化そうとして取りかかったというより、趣き深い情景を書き、人間の愛欲を中心とした社交生活を描きだすということを目的として、書かれたものだと思う。

が、われわれ読者が通説する時、そこにおのずから、複雑な筋の展開の間に、ある一本の糸のように、ひとつのモチーフが貫いているのに気づく。それをわれわれが主題だという風に理解してもさしつかえはないだろう。

それは光源氏の一生の好色生活を通じて、対象の多様にもかかわらず、ひとつの憧れが支配しているという事実によって、象徴されている。

ひとつの憧れとは、それは幼くして死別した母に対するそれである。父の帝は母の桐壺を熱愛した。その父母の間に生まれた源氏は、あたかも父の母に対する感情を遺伝したかのように、ひたすら母を、あるいは母の面影を伝えた女性を愛することになる。

最初に愛したのは、父が母に生き写しとの評判によって後宮に入れた藤壺である。源氏は藤壺をまず母として愛した。が、その愛はやがて、異性への愛と変わって行く。そし

て遂に十八歳のある夜、彼女と契り、懷妊させてしまふ。

その頃、一方で源氏は藤壺の面影そのまゝの女の子を発見する。それは実際に藤壺の姪だった。彼はその少女を家に引きとり、理想的に教養をほどこし、やがて妻とする。源氏にとって、もっとも落ちついた生活は、この娘、紫上との結婚生活だった。

が、晩年に至って、彼はまた藤壺の別の姪を妻とする運命になる。——そうして、重大なことが起こる。この妻、女三の宮は源氏の先妻葵上の兄（頭中将）の息子の柏木との間に、子供を生んでしまふ。そして、ちょうど彼と藤壺との間の子が、自分の弟として育てられ遂に帝位にのぼったのと同じように、今度は源氏はその柏木の子の薫を、実子であるかのように世間をよそおって暮らして行かなければならなくなる。

父の場合は自分が父でないことを知らずに育てたのだが、今度は自分は充分知りながらその苦しみに耐えなければならぬわけである。あるいは、青年時代には、自分の子を弟であるかのようなふりをして暮らす苦痛であり、晩年においては、その裏返しの苦痛である。

つまり、源氏にとって、永遠の憧れの対象である。母系母系の女性とは、最初は父の女を奪うことによってのみ、願いがかない、そして最後は、その復讐であるかのように、手に入れた女は別の若者によって奪われたわけである。

ここに因果の観念がでてくる。犯した罪は報復的行為によって、やがては自分の身にかえってくるという、応報の観念である。作者は当時の仏教の教養によって、この観念を知っていたに相違ない。しかし、一方、彼女は現実には、幾つもの事件によって、社会のなかで、そうした因果応報の理が実現するのをまざまざと見て、おののいたという経験があるのだろう。それがこの膨大な小説を構想するに際して、その物語の軸として、このような場合を選ぶようにしたのであらう。そうして、因果の理は、それが愛欲に現われる場合、他の憎しみだけの場合と異って、愛という矛盾した感情が含まれることにより最も深刻であると知っていたのだろう。

いったい、永劫回帰の観念は、歴史的発展の観念よりは、人をして生に苦味を感じさせるものなのである。

7 風 俗

『源氏物語』は作者のある哲学的観念を展開するのではなく、（少なくともそれを第一の意図とするものではなく）趣きある情景を描きだすことを目的とした小説であるとい

った。
そしてこれは注意しておかなくてはならないのだが、われわれは近代小説の観念を知っており、現代の作家たちはその理念によって小説を書いているといっても、わが国の